

寺院墓地の再建で檀家流出を阻止 かさ上げ閑上地区の復興が一步前進

(有)石伸 (宮城県岩沼市)

東日本大震災で津波に襲われた宮城県名取市閑上地区。市の復興整備計画により、現在は五メートルほどかさ上げされた状態にあり、その一画で東禅寺(曹洞宗、三宅俊乗住職)本堂と墓地の再建が進められている。その一部区画の墓石がこのほど完成し、去る一月二十八日に納骨式が行なわれた。墓地の再建は、隣接する岩沼市に店舗を構える(有)石伸(菅原裕典社長)



(有)石伸の大本専務

が行なった。

名取川の河口付近に位置する閑上地区は、震災前は約六千人、二千百世帯が暮らす港町だった。同地区を襲った津波の高さは、閑上漁港付近で八・五メートルに達したとされ、町全体が壊滅的な被害を受け、およそ八百名もの人命が奪われた。周辺部に避難できる高台がなく、地震後に津波を知らせる防災無線が鳴らなかったことも被害を拡大させた。東禅寺も本堂が大破し、先代の住職夫妻と檀家の二百三十五名が犠牲となり、境内にあった約四百基の墓石も津波に押し流され無残な姿となった。

仙台空港の近くにある同社の店舗にも津波は到達し、約七〇センチほど浸水被害を受けた。同社が今回の墓地再建を依頼されたのは、被災した東禅寺の今後の対応について、仙台市の寺



【上】津波に襲われた東禅寺の墓地。後方の本堂と庫裡もほぼ全壊した

【右】墓地内には折れた電柱や鉄くずなども瓦礫となって流れ込んできた



※震災当時の写真は、ご提供いただきました

院から相談されたことが直接のきっかけだったが、実は同社と閑上地区を結びつけるご縁はそれ以前からあった。

「震災後『石材店として何かできないか』という思いもあって、その年の八月に当社の企画で送り火による追悼供養を閑上地区で行なわせていただきました。キャンドルアーティストとして有名なキャンドル・ジュンさんに協力をお願いしたところ、快く承諾してくださり、マスコミにも大きく取り上げられ、地元だけでおよそ六百名もの参加がありました」

(有)石伸の^{おもと}大本隆専務はそう話す。

追悼イベントでは、竹灯り（竹灯笼）を千三百本用意。仙台の七夕まつりに使った竹竿を再利用してつくったものだ。それを被災者ら住民の皆さんと一緒に並べて「きぼうの光」という文字をつくり、そこに火を灯してメッセージを発信した。当日は、キャンドル・ジュンさんとかつてから親交のあったMINMIや若旦那、イケメンズら多数のタレントも応援に駆けつけ、イベントを盛り上げてくれたという。

その後、墓地の再建計画が本格的に動き出し



同社の企画で閑上地区で開催された送り火供養のようす

たのは、震災から三年後のこと。その計画を進める上で、檀家の流出をいかに防ぐかが一番の問題だった。被災寺院の檀家数が震災前後で三分の二から半数近くまで減少していたなかで、閑上地区にどれだけ住民が戻ってくるのか、また復興できたとして、墓地の再建にどれだけだけの予算を見込めばよいのか、それを正確に見極め

る必要があった。

同社は、閑上地区で被災した寺院にその方法と再建計画を提案したほか、檀家へのアンケートを実施。「再建後、閑上地区に戻るのか」「閑上に戻った場合、墓地はどうするのか」「震災時に預けた墓石はあるのか」「いつ頃、墓石を建立するつもりなのか」など、檀家の現状と今後の意向を確認した。これにより、檀家の一割がすでに別の墓地を購入していたことも判明した。

そして墓地再建の構想を説明した上で、どのくらいの広さの墓地を希望されるのか確認し、そのバランスを考えて墓地全体を設計した。ただし市の復興整備計画が度々変更されたことで、その度に設計図を修正しなければならなかった。

震災から間もなく六年になるが、墓地の再建にこれだけ時間が掛かったのは、同地区のかさ上げ工事が大幅に遅れたことに起因する。市の復興整備計画が公表されたのは平成二十四年三月だが、その後、市が住民の意向を確認したところ、「閑上に戻りたい」とする回答が二五・二%（四人に一人）と想定数を下回り、国



【写真2点】名取市閑上地区で再建中の東禅寺の墓地（右）。右奥の区画に完成した墓石が並ぶ。左の建物が建設中の集合災害公営住宅。別の区画ではいままの外柵工事が進められている（上）



が認めるかさ上げ事業の予算措置に必要な人口密度に満たなかった。そのため、市はかさ上げの規模を二度にわたって縮小。こうした住民調査や国の調整作業に手間取ったことが復興の遅れにつながった。昨年十月に公表された復興整備計画の最新版は、初版から十四回変更されたものだった。

閑上地区のかさ上げ工事は、ゼネコン主導のもとで行なわれた。被災した墓石等の上モノは災害廃棄物として処理されたが、外柵等はその場で粉砕し埋められることになった。ただしカロート内の遺骨については、震災後、遺族のわかる範囲で可能な限り拾い集めたものの、流出によって所有者が特定できなかつたり、収集しきれないものもたくさんあり、最終的な収集作業は「お骨を扱う供養の専門家」である石材店が請け負うことになった。

その収集作業を同社が行なったが、(株)全国石材施工協会の代表理事でもある、(株)井比石材工業の井比宏育社長が協力してくれた。当地の外柵はカロートと一体化したコンクリート構造が多いため、カロートの開口部は狭く、遺骨が取

り出しにくい。また土葬を改葬する場合、本来は火葬してから納骨するが、当地では土葬のまま改葬したのもたくさんあり、肉体的にも精神的にも大変な作業だった。

「当地の納骨は、散骨が主流です。土砂が流れ込んだカロートでは、取り出した土砂を別の場所（ふち）で飾（かざ）にかけて遺骨を選別しましたが、最終的に三・五トンもの遺骨が集まりました」

大本専務はそう述べる。

被災した檀家のお骨は、墓所が完成するまで別の寺院の敷地内にある仮の納骨施設で、ダンボールの箱に入れた状態で保管されているが、身元不明の遺骨については墓地再建後、永代供養墓内に合祀されるという。

東禅寺では、檀家の負担を極力減らすため、広さの異なる三種類の区画を外柵付きで用意した。さらに、それとは別に、元の外柵を再利用できる自由区画（更地）を確保。墓地中央部に、先代の住職が生前希望していた涅槃像をシンボルに使った永代供養塔が年内にもつくられる予定だ。

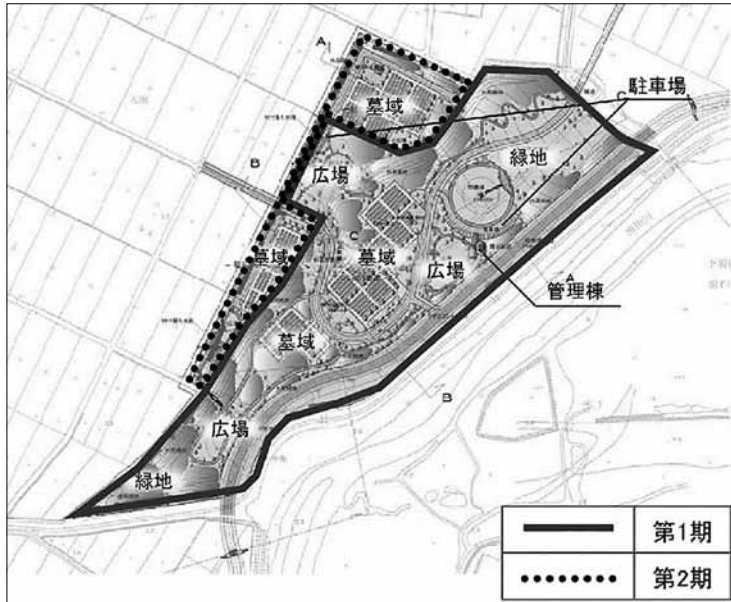
名取市内の一般的な墓地（三・五〜四平方メー

トル）の永代使用料が約六十万円であることを踏まえて、一番小さい区画の丘カロート式の完成墓所（お墓を元々所有していた檀家は永代使用料が掛からない）で最低五十万円から建立できる各種プランを作成し、同社では昨年二月頃から各檀家との商談を進めてきた。墓石用CADやCGを使って提案したほか、展示場には現物見本も用意した。

なかには被災した墓石の再利用を希望されるお客様もいたが、部材が散乱し、さお石が五〜六メートルも流されるような状況にあつて、外柵も含めて墓石一式が無事発見されたものはごく一部だったため、およそ全体の八割が新規での建て替えとなった。

「数年前、仙台市内の寺院で区画整理に伴う墓地の移転工事を千基ほど任されたことがあったので、遺骨の収集・管理、抽選会の実施など、その時の経験を活かすことができました」と大本専務は述べる。

区画の割り当ては、誰もが納得し、できるだけ各人の希望に沿えられるように、抽選会で引いた順番ごとに決定した。また親戚や兄弟など



名取市で計画中の市民墓地公園のイメージ図



永代供養墓と幾つか墓石が立つ観音寺及び持法院の墓地

で隣接する区画を希望される方は、抽選後、本堂から離れた場所を選んでもらった。
外柵工事は、(社)全国石材施工協会を通じて、冬季など仕事の少ない地域の石材店を紹介してもらい、基礎工事や目地の取り方、金具・接着剤の使い方など当地での施工法を教えた上で手

が基礎工事まで行ない、それ以外は檀家が自己負担することになっている。すでに一部の墓石と永代供養墓が完成し、納骨まで済んでいた。
閑上地区で被災した寺院は、東禅寺のほかに真言宗の二カ寺があり、そのうち津波で住職が亡くなられた持法院の墓地は観音寺と合併して再建することになった。こちらの墓地は両寺院が基礎工事まで行ない、それ以外は檀家が自己

なお名取市では現在、市民墓地公園を整備する計画を進めている。防災機能を含む公園施設として、第一期が被災者向けに約五百五十区画、第二期で市民向けに約千区画を用意する計画で、平成三十年に完成する見通しだが、こちらはまだ未着工の状態だ。
「今回二つの寺院墓地が完成したことで、閑上地区で亡くなられた方々の半数以上、およそ六割がここに埋葬されることになると思われる。一方、名取市内の寺院墓地にまだ空き区画があることや永代供養墓の希望者が増えていることを考えると、市が計画中の被災者向けの墓地公園にどれだけの利用者が集まるのか、正直、微妙なところだ。しかも、その規模の墓地でどれだけの収益が見込めるのか、どうやって施設を維持していくのか、それも疑問視されています」

大本専務はそう述べていた。

◎(有)石伸

宮城県岩沼市下野郷字新畑41-6

TEL 0223-29-4664

<http://sekishin.info>